

[書 評]

「原因になる力」を求めて

鵜 飼 哲

（一橋大学大学院言語社会研究科教授）

2011年4月から2015年3月。京都大学人文科学研究所の共同研究「現代思想と政治」の集団作業はこの二つの日付のあいだに遂行され、四年間の討議の時間ののち、参加者は各自一本の論文を寄せた。編者の一人である王寺賢太氏は、この作業の制度的枠組み及び学問的諸前提を「あとがき」に綿密に記している。また、参加者の幾人かがこの作業と並行して組織ないし関与した隣接テーマをめぐる討議や社会・政治状況への介入についても詳細な記録があり、本書がそのなかで成立した重層的なコンテキストの一端が示されている。

この二つの日付は、言うまでもなく、いくつものことを語る。東日本大震災と福島第一原発の爆発事故、ほぼ同時期に展開したチュニジア革命に端を発するアラブ諸国の民衆叛乱、シリア、リビアの内戦、パリのシャルリ・エブド襲撃事件まで、この共同作業と同時代的と呼びうる出来事は数多い。日本では自民党が政権に復帰し、反原発運動、街頭差別煽動に対する対抗行動、秘密保護法や安保関連法の制定反対運動、そして沖縄の反基地闘争など、いくつもの政治課題が社会空間を横断した時期とも重なっている。

本書はしかし、こうした内外の政治的動向に対し、「積極的に距離」を取るという選択の上に成立している。この「迂遠」なスタンスは、科学的客観性を担保するための知的観照とは対極的な、ある実践的性格を持っている。この姿勢にはルイ・アルチュセールが「マキアヴェッリと私たち」で論じた、遠方の標的を目指して特定の角度で上方に矢を

放つ射手になぞらえられる、特異な思考様式に通ずるところがある。「高く狙いを定めること＝実在するものを越えたところに狙いを定め、実在しないが、実在すべきである的を射抜くこと。」読者の側も、したがって、本書のさまざまな論文を読み進めながら、この共同作業の不可視の標的や矢の角度のことを、絶えず意識しないではいられないのである。

もう一人の編者でありこの共同研究の班長を務めた市田良彦氏は、本書が「現代思想と政治」という二つの焦点を持つことについて、その含意を「序」において簡潔に述べている。

「『政治』とともに『現代思想』は衰退したから『現代思想と政治』であり、『政治』の衰退にもかかわらず生き残ったから『現代思想と政治』である。この生き残る力もまた、あるいはこの力こそ、『現代思想』に特有の『政治』性なのではないか。私たちはこの点でも、あるいはこの点でこそ、引き裂かれている。言い換えれば本書は、一つの矛盾を積極的に引き受ける意志の表明である。引き受けるべきであるという私たちの主張である。」（17-18頁）

ここで「引き裂かれている」と言われる「私たち」には、少なくとも三重の可能性が想定されているだろう。「政治」と「現代思想」が相即的に衰退しているという判断と「政治」の衰退に対して特定の「現代思想」は一定の抵抗を示しているという判断、この二つの判断を分かち分割線は参加者個々のあいだにも、また個々のなかにも、そして共同

研究の集団的個体を貫いても走っていることがありうるからだ。しかしこれは「現代思想」の評価をめぐる分岐であって、「政治」の衰退という判断のほうは、この表現の第一義的な意味では、これらの可能性すべての前提をなす認識として共有されているかにみえる。「私たち」という人称を正当化するのはまずこの認識であり、本書に収録された論文はいずれも、この前提を踏まえて議論を進めているように思われる。

もっともここで語られる「政治」の衰退は逆説的なものであり、「すべては政治である」という命題の出現をその徴候としている。市田氏によれば、「現代思想」に属するとされる思想家たちはそれぞれこの命題に独自の解釈を提出してきた。フィリップ・ラク＝ラバルトとジャン＝リュック・ナンシーは、「政治と哲学の共属」という「人間の目的＝終焉」(1968)におけるジャック・デリダの議論を踏まえ、その拡張と「退引 (retrait)」の同時進行の過程の分析に彼らの共同作業の焦点を定めた。一方アラン・バディウにとっては「すべて」はむしろ哲学の名であり、ありうべき「政治」はその外部に設定された。またドゥルーズとガタリはある時期以降「68年5月」を起きなかった出来事として肯定する挙措を示し、そのことを通して潜勢的な出来事としての「政治」の思考に輪郭を与えることを試みた。「政治」の可能性をより積極的に思考しようとしたジャック・ランシエールにとっては、「不和の演出」が歴史貫通的に社会空間の随所で可能であることが「すべて」の意味であり、この点で「政治」を公共空間に限定するハンナ・アーレントと一線を画す。最後にミシェル・フーコーについて、市田氏は晩年の講義録を通覧したうえで初期の主要著作『狂気の歴史』に立ち返ることで、「狂気としての政治」という重要な仮説を提出している。

「序」の最後に、〈マルクス主義〉〈精神分析〉〈政治哲学〉という、本共同研究を構成

する「三つの環」に関する議論が置かれている。ここではまず、「討論」「友／敵関係」「共同体」「個人」など、現代政治哲学の諸潮流が「政治的なもの」の概念の弁別特徴とみなすモチーフが順次批判的に検討されていく。それでは「政治」をなお肯定的に規定する可能性はどのような方向に求められるのか。「現代思想」には、自らのなかに取り込んでまるごと更新するか、それともそこから「離れる」こと自体を概念化すべき——現実の「政治」がそこから自由になるために——問題として、決定問題／因果性論が残った。」(51頁)言い換えれば、「原因になる力」をいかに概念規定するかという一点に、ここで「現代思想と政治」の研究課題は絞り込まれるのである。

この「力」は、一方では、「主体」の廃位後に本質／現象図式とは別の仕方では資本の運動を記述する試みを通じて探求される。他方、この課題のちょうど裏側に、構造的決定による存在欠如として定義される「主体」という、ラカン派精神分析理論の問題構成が位置づけられる。この「主体」概念の重要性は、「現代思想」の存続がそこにかかってきたと言われるほどに強調されている。本書の副題でもある「資本主義・精神分析・哲学」は、以上のような問題意識のなかで、きわめて緊密に連結されていることが了解される。

もちろん「序」は各論文の提出後に執筆されたものであり、ここに読まれるのが論証戦略、文体、思想史的展望等、非常に大きな隔たりを示す論文相互の差異を横断して、あえて素描された力線であることは言うまでもない。とはいえ、この「序」を通して読者は、本研究会に固有の場と時間に接続され、重ねられた討議の時間の密度に触れるのであり、ここで出会われる「私たち」という語の内的緊張は、本書を読むあいだ、そして読後も長く、通奏低音のようにその波動を伝えて止まないものである

「序」における「私たち」を構成する三重の内的差異は、幾人かの思想家をめぐる論者間の評価の違いを通してまず立ち現れる。それは一方ではジル・ドゥルーズが単独で、あるいはフェリックス・ガタリとともに世に問うた仕事をめぐって、また他方ではアントニオ・ネグリが社会闘争と哲学的探求のあいだで生産した一連の著作をめぐって、かなり鮮明に見て取ることができる。

ドゥルーズ／ガタリについては、小泉義之、長原豊、佐藤嘉幸の三氏が基本的に彼らの仕事を評価する立場を示しているのに対し、松本潤一郎氏が異論を提出する構図になっている。政治的なものの動因を差異概念に即して思考するか、それとも矛盾の対立として把握するか、大局的にはそのような構図が見られるが、この立場の隔たりそのものが本書のなかでは差異とも矛盾とも単純に規定しかねるある弾性を帯びており、研究会における意見交換がもたらした集団的な思考の〈結果＝効果〉をそこに認めることができるように思われる。

小泉論文「ドゥルーズ／ガタリにおける政治と哲学」は、両者が『アンチ・オイディプス』以来追求した「原国家」と資本主義の関係性の分析をたどり直したうえで、彼らの最後の共著でありソ連・東欧社会主義圏崩壊後に出版された『哲学とは何か』において、一方では資本主義の外部として想定されるものが、他方では哲学と政治の位置づけが、顕著な変化を示していることを確認する。哲学によって思考が解放され絶対的脱領土化に到達したのち、「概念的人物」の構成による「新たな地図」の作成を介して、ようやく思考の政治的方向づけが展望しうることになる。このようなもともと困難な局面に即して、ドゥルーズ／ガタリの最後の闘争の内実が緻密に検証されている。

長原論文「流れと捕獲の普遍史のために——三位一体と常駐し睥睨する〈一者〉」は、

同じくドゥルーズ／ガタリの資本主義と「原国家」をめぐる議論から出発しつつ、準自己原因的とされる資本の運動の詳細な分析に向かう、進行中の大きな作業の一環をなすものである。それはドゥルーズ／ガタリによるマルクス解釈の系統的な研究であり、とりわけ資本にまつわる家族的隠喩系の分析に力点が置かれている。ドゥルーズ／ガタリの語る「独身機械」がいかにして「家族持ち」になるのか？——そのような意表を衝く問いを一方で掲げながら、例えば『資本論』に見出される「資本の胎内」という表現における女性ないし母のイメージが、ドゥルーズ／ガタリの議論のなかで「瞬間的抹消」される「行論的意味」を問題にするあたりは実にスリリングで、今後の展開が待ち遠しい。

佐藤嘉幸論文「分裂分析と新たな主体性の生産——ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』を読む」は、「分裂分析」という概念がドゥルーズの思考へのガタリの介入によってどのように生成したかに関心を寄せる。「力能記号」というガタリのアイディアを、それこそが「欲望」だと考えたドゥルーズが「出来事の生産」という概念に練り上げていった経緯が、「分裂分析」概念の成立過程として丹念に分析されている。

それに対して松本論文「矛盾は失効したのか——思考の政治的時効」では、ドゥルーズに代表される差異の哲学に対し、「対話」の経験を通して弁証法を再発見する方が果敢に探られる。ライブニッツの「無限小の方法」に着想を得たドゥルーズ的な「多種多様体」のなかでは、「世界」の単一性を前提とすべき「革命的企て」は意味を失うのではないか。このような問いを発することによって、松本氏はみずからの問題関心が、この時代の様相に対する深刻な不安に発していることを率直に表明している。『矛盾の理論』等、1970年代のパディウの諸著作の検討を通して、彼がドゥルーズの反復によって〈多〉ではなく〈二〉の思考を抽出したという解釈を示し

ている点はとりわけ興味深い。「私たちは〈私たち〉を私たちに届けることができるか」(五三八頁)という本論文の最後の問いは、本書中で出会われるあらゆる言葉たちのなかで、「序」における「私たち」という呼称と、もっとも深く響き合っているように感じられた。

アントニオ・ネグリに関しては、王寺賢太、中村勝己、廣瀬純の三氏が彼の政治理論、労働の存在論を基本的に肯定する立場からの検証を行っているのに対し、長崎浩氏が批判的留保を示すかたちになっている。

王寺論文「マキアヴェッリとポスト六八年の政治的〈構成〉の諸問題」は、クロード・ルフォール(『マキアヴェッリ、作品の仕事』)、ルイ・アルチュセール(『マキアヴェッリと私たち』)およびネグリ(『構成的権力』)がそれぞれに遂行したマキアヴェッリ再考の試みの突き合わせを通して、広義の現代リベラリズムへの対抗構想の輪郭を描こうとする。ルフォールの大著が国家と社会、貴族と民衆の二重の分裂から政治共同体を考察するマキアヴェッリの問題構成を、この分裂を〈社会的なもの〉の自己保存の動因とみなすことによって国民国家内部の民主的合意形成の枠内に回収するのに対し、アルチュセールによる解釈の力点は、マキアヴェッリの構想における、イタリア統一を担うべき「新しい君主」と「新しい公国」の不在という「空虚」に、理論を实践に開く「出会いの唯物論」、「はじまり」の思考の積極的な端緒を見る。一方ネグリはマキアヴェッリの政治論を国民国家創設の戦略論という枠組みから外し、都市共和国の統治の本質をなす還元不可能な分裂から、「民衆の多数者」すなわち「マルチチュード」を主体とする民主政の「分離＝絶対化」の可能性を導き出す。そのとき「空虚」は、「構成的権力」としての「マルチチュード」の力が発現する場として捉え返される。

中村論文「オペライズモの光芒—トロン

ティの社会的工場論と〈政治〉」は、第二次大戦後のイタリアの労働運動指導者マリオ・トロンティの思想的変遷をたどり、「労働の拒否」戦略の起源、労働者闘争と政治の関係、そしてネグリに代表される次世代の潮流との継承と分岐の諸相を分析する。1960年代のトロンティの「社会的工場論」が「労働力」規定からの脱却を主要なモチーフとしていたのに対し、1970年の「熱い秋」を経験したネグリ等によって「社会的労働者の中心性」というテーゼが打ち出され、やがて「マルチチュード」概念を軸とした新たな闘争の論理が構築されることになる。トロンティのオペライズモが「政治的なものの自律性」の承認へと行き着いたのとは対照的に、アウトノミア運動では「政治」は労働の存在論に埋め込まれることになる。

廣瀬論文「情勢の下で思考する——アントニオ・ネグリと「六八年の哲学」」は、このネグリの思想を広義の「68年」経験を分有する他の思想家たち、とりわけジャック・ランシエールおよびアラン・バディウと比較し、マルクス主義に対するその独自の姿勢を浮き彫りにする。2009年から毎年開催されている「コミュニズムの理念」をめぐる国際会議は、左派的系譜に出自を持つ現代思想家たちが、革命／コミュニズム／マルクス主義という変革思想の複合的な伝承を、もはや統合的に行えていないことを明らかにした。会議の提唱者であるバディウ(とスラヴォイ・ジジック)にとって、「コミュニズム」は端的に「理念」であり、資本の物質的運動とはむしろ積極的に切断されなければならない。ランシエールは「大衆知力の解放」を無差別に「民主主義」「政治」「コミュニズム」と呼び、その可能性を古代ギリシャのポリスからポストフォーディズム期の現代まで歴史貫通的に想定する。それに対してネグリは、社会の資本への「実質的包摂」という現代資本主義認識に立って、マルクス主義の思想的遺産のうち弁証法的唯物論を排して史的唯物論を堅持す

る。それは「生産関係の批判」から「生産諸力の構成」に唯物論的思考の焦点が移動したことを意味する。1993年の論文でネグリは、1970年代後半のアルチュセールにも、同様の「構造から身体への原因の移動」があったことを指摘するが、これは「原因になる力」の所在に関する決定的な理論的転回を意味していた。

以上三者のネグリ評価に対し、長崎論文「六八年のなにが政治思想を促したか」は、東大共闘運動へのみずからの関与を回顧しつつ、ネグリの『レーニン講義』を批判的に検討する。「大衆の党」と「固有の党」という独自の概念規定のうえに具体的な運動過程における活動家の集団性を分析してきたみずからの作業の蓄積に照らして、ネグリによる「大衆前衛」という概念の不分明さを問題化するのである。「大衆前衛は運動のイニシアティブなのか叛乱機関なのか党なのか、どんなタイプの党なのか。六八年は現実の組織戦術としてばかりか政治思想として、こうした問いへの応答を促していたはずである。」(275頁) ここで問われているのはひとりネグリの思想だけではない。社会闘争に実践的に関与しようとする誰にとっても避けることのできないこのような問いが生まれる場となったことに、本研究会の歴史的意義のひとつを見て取ることができよう。

ミシェル・フーコーは以上三人の思想家とは異なり、本書中で葛藤をはらんだ評価の対象とはなっていない。箱田徹、布施哲、中山昭彦の三氏がそれぞれ独自のスタンスで、彼の仕事から現代世界を分析するための必須の手がかりを得ようとしている。

箱田論文「ミシェル・フーコーの内戦論—— 市民社会戦争と歴史の真理ゲーム」は、一気に混沌の度合いを深めたポスト・リーマン期の世界情勢を見据えつつ、1975-76年のフーコーの講義『社会は防衛しなければならない』を手がかりに、国境の内外を横断して

拡大する「テロとの戦争」と、社会の私有化・企業化とそれへの民衆的抵抗というかたちで二重化されたグローバルな「内戦」状況の分析を試みる。フランス17世紀の反動派貴族であるブーランヴィリエによるフランス社会の二種族間戦争論は現代につながる歴史叙述をめぐる抗争の先駆であり、二種族論が19世紀末に一種族論に転換するに及んで「国家人種主義」の構造が確立する。「テロとの戦争」「麻薬との戦争」等、現代国家による「Xとの戦争」がつねに「レイシズム」を随伴する必然性はここにある。権力論と統治性論の関係をめぐる現在のフーコー研究の微妙な論点にも触れながら、市民社会がその内側から生み出す「戦争」の系譜学的分析を進める手際は見事である。

布施論文「俗物に唾することさえなく—— フーコー、シュトラウス、原理主義」は、1979年のイラン革命の際の「政治的靈性」をめぐるフーコーの言説を出発点に、米国の新保守主義との関係が取沙汰されてきたレオ・シュトラウスの政治哲学を斬新な角度から読み直す。20世紀の政治史と思想史のもっとも生々しい接点を切開することを通して、21世紀に入って顕著となったリベラリズムと原理主義の同時代的台頭を俯瞰的に考察する、きわめてアクチュアルな作業であると言えよう。政治的シオニズムからアフロ・アメリカンの公民権運動まで、諸権利獲得型の運動すべてに、シュトラウスは次第に強い留保を示すようになっていく。論者はその過程を仔細にたどることで政治における「原理主義」を理論的に定位する可能性を開こうとする。「序」における議論との関連で言えば、「すべてが政治である」時代に「すべて」の彼方を思考する試みにほかならず、大変多くの示唆を受けたことを特記しておきたい。

中山論文「ヴァルター・ベンヤミン— 暴力・力と歴史哲学」は、フーコーの『言葉と物』の独自の解釈を介してベンヤミンの著作、とりわけ『暴力批判論』と「認識批判的序

章」(『ドイツ悲劇の根源』)に共通のモチーフ群を析出することを試みる。「言葉」と「物」の分離はニヒリズムとして捉えることができるが、その性急な克服の志向はともすると深刻な思想的隘路に誘い込みかねない。ベンヤミンが用いた「剥き出しの生」という表現がジョルジョ・アガンベンによって擬似的に神聖化された例は、このような危険の目立つ事例のひとつである。ベンヤミンが向かおうとしたのは「真理」と「暴力・力(Gewalt)」と「名」が〈ひとつ〉であるような地平の回復であり、「言葉」と「物」の一致とはまったく位相の異なる企図をそこに認めなければならない。

以上三つの論文からはフーコーの遺した仕事の意義が専門研究者によってつねに「現在の歴史」として検証されていること、異なる領域の研究者による受容の深化とともに、他の思想家との思いがけない「星座」の形成を通じて新たな探求の端緒が開かれうることが確認される。ここにもまた、本共同研究の独自の成果を見ることができるだろう。

ここまで「序」における論点整理を参照しつつ、本共同研究の共同性のさなかに走る生産的な差異および／または矛盾のありようを、複数の論者が取り上げている思想家の評価の多様性を通して瞥見してきた。これ以降はやや自由に、各論文を読みながら評者の脳裏に浮かんだ問いのいくつかを書き留めておきたい。

立木康介、上尾真道両氏による精神分析を主題とする二本の論考は、それぞれ反精神医学運動とラカン派精神分析のかかわり、「パス」の政治性を主題とするもので、学派の内側からその複雑な経緯が明らかにされており、あらためて眼を開かれる思いをした。それと同時に、「すべてが政治である」という命題の含意の分析をひとつの課題とする本共同研究の方向性との関連で、精神分析理論に依拠

した政治的考察のありかたについて考えさせられるところがあった。

例えば『民主的ヨーロッパの犯罪的傾斜』(2003)のジャン＝クロード・ミルネールは、政治において「すべて」「全員」という言葉が意味するものを問うことから始める。彼はラカンのセミネール『アンコール』における性別化の論理式を援用し、男性的な欲望の構造と政治的な「すべて」の構造のあいだの相同性を指摘し、それを国民国家の原理と比定する。ヨーロッパが国民国家の体系として組織されていた時代、ユダヤの共同体はアーレントが言うように「無世界的」であり、固有の境界をもちえなかった。それは女性の欲望の構造と同様、「すべてではない」様相を示していた。

ところがホロコーストののちにイスラエルというユダヤ人の国民国家が誕生すると、今度はヨーロッパの国民国家間の境界が弛緩し、20世紀末になるとヨーロッパ連合の構築に進み、2003年にはヨーロッパ大陸の主要国はアメリカのイラク戦争に反対するに至る。この成り行きにミルネールは激しい危機感を募らせる。この本のもととなったエルサレムにおける講演で彼は、いまや「女性」化して「すべてではない」の論理に動かされている、グローバル資本主義と親和的な「民主的ヨーロッパ」が、今後地中海世界のイスラーム諸国を統合するようなことになれば、やがてイスラエルは孤立し、消滅する日が来るのではないかという警鐘を鳴らす。当時の状況からしても、そしてその後の事態の展開に照らしても、彼のこの恐怖が現実のなかに根拠を持っていなかったことは明らかである。鋭敏であるとともに的外れな、犀利であるとともに粗雑な、その極端な両義性において驚くべきこのような政治論が、往年の毛沢東主義者であり、ラカンの信頼の厚かった優れた言語学者によってなされたことは、「68年」以後の思想と政治、そしてそのなかでの精神分析の位置を考えるうえで、ひとつの深刻な症候

として注目にあたいするのではないだろうか。換は対称的であるという前提のうえになされて

沖公祐、佐藤隆両氏は、マルクス経済学の分野から本共同研究に独自の貢献を行った。本書に収められた論文中、評者の専門領域からもっとも遠い分野の仕事であり、無理解や誤読の可能性を恐れるが、あえていくつかの問いを記しておきたい。

沖論文「マルクス主義における再生産論的転回」はケネー、スミスからマルクスを経てスラッファ、アルチュセールに至る、再生産論の思想史の独創的な書き直しの試みであり、スラッファとアルチュセールによってマルクス主義のなかに「再生産論的転回」が生じたとする仮説を含んでいる。自己原因としての資本という観念は、この転回によって、むしろイデオロギー的に生産されたのではないかという主張である。そのうえで、再生産論的転回によるマルクス主義の理論的危機を克服するヒントを、「国家のイデオロギー装置」論以前にアルチュセールが展開していた、諸生産様式の「節合」論のうちに探ろうとする。評者はかねてからドゥルーズ=ガタリの「原国家」論を、ピエール・クラストルによる「国家に抗する社会」論をアルチュセールの「節合」論を踏まえて読み替えたものと理解してきたが、資本主義がつねにすでに前提するとされる「原国家」を、マルクス主義的な「国家の死滅」の不可能性ばかりではなく、再生産論の隘路を突破する可能性も含む想定として位置づけうるのかどうか。小泉論文、長原論文、また市田氏の「序」における問題提起との関連でも、ここには熟考にあたいする論点が多々含まれているように思われた。

佐藤隆論文「債権債務関係と商品交換—あるいは市場における権力の生成」は、現代思想の分野で現在マウリッツォ・ラッツァラートなどが代表している、ネオリベラリズム分析の中心に負債論、貸借論を置く理論的傾向に対し、経済学の立場から原理的な疑問を投げかけている。そのような論点の転換が、交

換は対称的であるという前提のうえになされてはいないか、市場という場の権力関係がまず解明されなければ、貸借論の正確な位置づけは望めないのではないかという指摘である。貨幣の物神性の根拠を、貨幣譲渡と所有権移転請求権行使が「短絡」することにあるという一点に議論を絞り込むことによって、「市場の分析視角の根底に非対称的な債権債務関係を設定すること」(335頁)が資本主義批判の最初の一步であるという主張には強い説得力を感じた。ただし、おそらく評者の理解不足によるものと思われるが、このような問題設定が、貸借論ではなくとも、全面化された負債論と、理論構成のどのレベルで区別されるのかという問いも残った。能力の許す範囲で、今後のみずからの課題にしていきたいと思う。

上田和彦、佐藤淳二両氏の論文は評者の研究領域に近いこともあり、その意味で考えさせられるところが多かった。最後に両氏の論文の余白に、若干の私見を記させていただく。

上田論文「モーリス・ブランショの「政治参加」(一九五八—一九六八)」は、フランスの作家モーリス・ブランショのアルジェリア戦争期および「68年5月」における「政治参加」の内実を多角的に検討した印象的な試論である。

第二次世界大戦以前は右翼的な思想の持ち主だったブランショが、戦後のフランス史の決定的な局面で関与した独特の反体制活動は、どのような思想の転換に動機づけられていたのだろうか。私見ではドイツ占領期の経験に鍵があり、1958年以前の著作を問う必要があるだろう。とりわけ「文学と死への権利」(1949)は重要であり、この論文ではフランス革命の際の「恐怖政治」が扱われている。フランス革命以後、すべての革命はテロルの契機を経ることになる。一方現代思想は近年までフランス革命自体を対象とすることにあまり積極的ではなかった。それにはどんな理由

が想定されるだろうか。前世代のブランショにこの文章があることは示唆的である。

ブランショのこの二回の政治参加を通して、彼がシャルル・ド・ゴールに対し、ある特別な意識を抱いていたことが浮かび上る。「ド・ゴールというただひとりの人間の権威に救国の力を期待しても、「空虚」を埋めるのは宗教的な至高性と化した国民主権だけであって、「空虚」がなくなるわけではない。そして、この宗教的な至高性は、政治的にはなにも具体的なことはできない」(179頁)。しかし、アルジェリア戦争の収拾過程でド・ゴールが何も具体的なことをしなかったとは言えない。彼は彼なりにこの「空虚」を埋めたのであり、マキアヴェッリの君主にふさわしい狡知を発揮して、フランスを植民地戦争からの脱却に導いた力量(『ヴィルトゥ』)には並外れたものがあつたことは認めなければならない。ブランショにとってド・ゴールとは何者だったのか。歴史的存在としてのド・ゴールと、ひとたび突き合わせて検証する必要はないだろうか。

「68年5月」はド・ゴールがさまざまな歴史的正当性を体現していたからこそ起りえたとも言える。それが正当性そのものに対する闘いだったからであり、ブランショの介入の要諦もそこにあつた。一〇年後のイラン革命は反正当性ではなく、対抗正当性の革命となった。そこにフーコーは——おそらく「68年5月」との対比において——「政治的霊性」を見たのではないだろうか。王寺論文が示しているようにマキアヴェッリの『君主論』に対する関心が現代思想のなかに一貫しているとすれば、それでは政治家論は、現代思想の課題足りうるのかという問いが出てきてもおかしくはない。ブランショのド・ゴールとの対決がそのネガであるような、ポジティブな政治家論があるとすればどのようなものになるだろう。さしあたりドゥルーズの「ヤセル・アラファットの偉大さ」(1984)とデリダの「ネルソン・マンデラの感嘆」(1986)

という二つの例が思い浮かぶが、こうした二義的とみなされがちなテキストを「現代思想と政治」という枠組みに置き直してみたとき、新たに見えてくるものがあるのではなかろうか。

佐藤淳二論文「『ルソー問題』から初期マルクスへ——疎外の論理をめぐって」は、「ポスト・デカルト」という視点によってホッブズ、ルソー以降、ヘーゲルを経て初期マルクスに至る思想史の書き換えを敢行し、疎外論の真の克服の条件を探る。

コギトの「形而上学」を社会実践の水準に移した最初の試みであるホッブズ的自然状態の想定に、ルソーは「所有もなく、人称性もなく、言語もない」、「自然」と一体に生き「動物」を模倣するだけの「普遍人」を置き換える。初期マルクスによるヘーゲル批判は、『法(権利)の哲学』における「ルソー問題」の消去、「一般意志」と「個別意志」の国家による揚棄という解決を、国家と市民社会の分裂を衝き政治領域の自立性を説くことによって批判した点で、「ルソー問題」の再提起という意味を持った。『ユダヤ人問題によせて』のマルクスは、『社会契約論』の「人間」と「公民」の二重性をフョイエルバッハ的な「類的人間」の論理で克服しようとする。「マルクスによるフョイエルバッハ理論の社会化はルソーを契機として行われた」(146頁)のである。そして『経済学・哲学草稿』における「労働」概念の前景化とともに発見される「プロレタリアート」こそ、「ポスト・デカルト」的な問いの到達点であり、「そこに生きるとされる『人間』が、そのまま『コギト』と同じように、作用というあり方でのみ存在する」(150-151頁)と言われるルソー的「自然人」「普遍人」と同様、「作用する関係性以外の実在は持ち得ない」(153頁)「疎外の形象」なのである。

このようにして析出されるのは労働者階級としての歴史的規定性において把握される以

前の「プロレタリアート」概念であり、「物理身体的な因果関係にとっては、空白としてしか現れないが、行為がなされた後になって振り返ると、そのような原因があったのだと想定され、そう信じられるから、「作用」であり「力」であるような」(153頁)なものかである。ここにはおそらく、「原因になる力」を求める本共同研究における、もうひとつの探求の方向が示されているだろう。

豊かな示唆に富んだこの思想史的展望のなかでももっとも強く印象に残ったのは、「カテゴリー」でもあり「メタファー」でもあるとされる「意志」によってコギトが「身体に落としこまれ」たルソー的「自然状態」の「異様」さの指摘であり、初期マルクスの「プロレタリアート」はその系譜のうちに位置づけられるという洞察であった。そこに論者は、エティエンヌ・バリバルとともに、「存在論的と存在的の区別とは別なもの、さらに別

なる「声」」(155頁)を聴く。これはマルクスをルソーとこのように連結したからこそはじめて聴こえてきた「声」だろう。ここでは研究の主体の側に明らかにある変容が生じている。それはすでにひとつの実践的効果であり、出来事であり、「原因となる力」の作用でもあるだろう。

本書のインパクトを受けて評者のなかにくつも新たな問いの渦が生じ、次第に形をなしつつある。しかしいまだ錬成のさなかであり、書評の結論として記すべきものではない。『現代思想と政治』という途方もない知的＝実践的挑発への応答は、いくつもの射程で、繰り返し試みていくほかはないだろう。2016年3月20日、本書の著者の方々との公開の討論は、文字通り忘れ難い時間となった。あの場に招待していただいたことに、あらためて深く感謝したい。